前橋文学館報

萩原朔太郎記念　水と緑と詩のまち

No.1 1995.3

詩人という名の私

谷川俊太郎

～第5回前橋文学館アートステージ 谷川俊太郎トークから～

聞き手：中野和夫（学芸員）

平成6年2月27日(日)、当館3Fホールにて、第1回萩原朔太郎賞受賞者の谷川俊太郎氏のトークが行われました。以下はその一部を抜粋したものです。

中野（以下N）　大岡信さんとの対談で、詩的原体験のお話があって、そのことが今の詩人谷川俊太郎のひとつの背景になるのではないかと思うので、その辺ちょっとお伺いしたいんですが。

谷川（以下T）　あれは自分であとから考えて思いあたったっていうことなんですけどね。ぼくは、一人っ子で母親っ子で、母親が死んだらどうしようなんて考えてる子どもだったんですよね。いじめられっ子だったし。だから子どもなりに喜怒哀楽っていうのがいろいろあるわけですよね。だけど、確か小学校三年か四年か何かの時にわりと朝早く起きたら、隣のうちのニセアカシアの木に朝日がさしている風景に、何か生まれて初めてまあ感動したわけですね。その感動っていうのが、たとえば音楽に感動するとかすばらしい風景に感動するとかっていう最初の体験だったと思うんですよね。日記にも書いた記憶があるんですけど、「きれいだと思った」とかって。その時はまあそういうもんだと思ってたんだけど、後になって考えてみるとたぶんその時何か自分が喜怒哀楽ではない新しい感情を体験したんじゃないかなあ、と思って、それが詩的な感動の原体験かって思っただけであってね、誰にでもあるんじゃないかなあと思うんですよね。

N　その辺第一詩集の『二十億光年の孤独』の当時で言えば宇宙感覚みたいなものと通ずるところはあるんでしょうか。

T　どうなのかなあ。自分じゃよくわかんないですね。ぼく、詩書き始めたころ、詩なんて全然好きじゃなかったわけだから。ぼくはずっと模型飛行機とラジオと自動車に夢中だった人なんですよね。そのころを振り返ってみると、友達に誘われたってことと、受験勉強してる時にほかの学科は全然わかんなくて、後ろの投稿欄はわかったから何か書いてみようかって思ったことと、うちには父が文芸時評なんてやってたから詩集もけっこうあったんだけど、それを進んで読むってことはほとんどなくて、友達がうちへ来ておまえこんな詩集があるじゃないかとかって言うから何か読むと。それで、詩の書き方みたいなものなんかの本もちょっと読んだりしてたんだけど、書き始めてからの何年かは、これは本当に自分の仕事になるって思ってなかったと思うんですよね。それなりに真剣に書いてたことは書いてたと思うんだけど。だから、自分が詩人であるっていうルーツがどこにあるかっていうのはぼくは全然わかんないっていう感じがしますけどね。

N　そうすると、詩で自己表現をしてそれをある意味で職業にして行くことを、いつごろからお思いになったんでしょう

か。

T　詩っていうよりも、とにかく何かを書いて食ってくっていうことは、書き始めてしばらくしてからもうそうするっきゃないからやってましたねえ。ぼくは何しろ大学に行くのがいやだって言っちゃったから。父も不承不承だけどそれを認めてくれたわけですね。それで、じゃあおまえ、いったいどうやって食ってくんだって言われた時に、詩のノートを見せたみたいな。けっこう普通の若い人と同じように追いつめられていたわけでしょう。それで、書いたらそれが幸運にも雑誌に載って、七千円ていう原稿料今でも覚えてるんですけどももらったわけですよね。その後からぽつぽつたとえば歌の作詞してみないかとか、何かの雑文みたいなの書いてみないかとかっていうのが出てきて、片っ端から引き受けるわけですよね。（中略）まあ自立して生活したいということがまずありましたね。当然親のスネかじってたんですけれども。だからいい詩を書くとかなんとかってことよりも先に、何でもいいから文筆で、自分のできることを書いてね、生活を安定させたいっていうのが始まりだったような気がするんですけれども。

N　そうだとしても、書いたことが評価されなければ、文筆としての仕事が成り立たないわけですよね。そういう、これでやって行けるっていうような手ごたえみたいなものはおありだったと思うんですけども。

T　そうですねえ。手ごたえっていうか、生活の不安がなくなったっていうのはやっぱり、うーん、「マザーグースのうた」っていう翻訳がばかに売れたんですけども、そのころからじゃないかなあ。もうちょっと前かもしれないけど。収入不安定でしょう、我々自由業は。すごくこう、不安があったわけですよね。

N　マザーグースのころって言えばもう、詩人谷川俊太郎として、押しも押されぬ存在だったと思うんですけど。

T　いや一応ね、それはそうだったんですよ。七十年代ですよね、たぶんね。だけどそうだなあ、今ぼく、すごく生意気なようだけど、詩は天職だと思うようになったんですよね（笑）。何年か前から。だから本当に自分は詩に向いてる、あるいは、詩っきゃ能がないっていうふうに思ったのは、本当に最近のような気がしますねえ。まあ最近っていっても、十数年前とか、まあ二十年前にマザーグースだとすればその頃とか。

N　「鳥羽一」という詩の中の有名な言葉で「詩人のふりはしているが私は詩人ではない」というのが、ポスターにもなって一階にも展示されています。その言葉だけ取り出すとひとり歩きしちゃうんでしょうけど、それが出てきた前後っていうのは、どんな状況だったんでしょうか。

●たにかわ しゅんたろう
昭和６年（1931）東京生まれ。18歳ごろから詩を書き始め、昭和25年「文学界」に発表。昭和27年、第一詩集『二十億光年の孤独』を刊行。詩作のほかに作詞、翻訳、童話制作など、多方面で活躍。数多くの文学賞を受賞。平成5年（1993）『世間知らず』で第１回萩原朔太郎賞を受賞。

T　あれは、ロッテルダムの国際詩祭があった時に、事務局がその二行はおもしろいっていうんでポスターにしてくれたんだけど、行ってみたら、ぼくらが泊まるホテルのフロントにポスターが貼ってあるわけですよね。他の詩人のポスターも一緒に。で、フロントの髭のおじさんに、日本の詩人の谷川俊太郎だって言ったら、これ書いたのおまえかって。そうだって言ったら、おまえいったいじゃあ何なんだって、そのフロントのおじさんにまできかれちゃってねえ、こまった記憶があるんですけどね。(笑)

(中略)よく何か書くと、最後に括弧して詩人なんて新聞なんかに付いて来ますよね。あれは他人が付けてくれるんで、自分で言ってるんじゃないんですよ。ぼくは自分で詩人だっていうふうに言ったことはないです。

前にロサンジェルスでレンタカーのオフィスへ行って職業欄に「ライター」って書いたんですよね。そうすると、そのおばさんが、おまえはなにをライトしとるかってきくわけですね。で、そういう時にやっぱり恥ずかしくなるんですよね。詩を書いてるっていうのは。何かちょっとね、モジモジしながら言うっていうのが正式な言い方だと思うんです。それでモジモジしながらポエトリーだっていうと、「オー」なんて感激してくれるわけね。それで、私のオフィスにある一番すばらしい車をおまえに貸してやるなんて言ってね、すごい真っ白な派手な車なんか貸してくれたりするんだけど、何かそういうふうに問い詰められて、実際に具体的にやってることとして、私の書いてるのは詩というジャンルに属する書き物です、というふうに言うべきもんだってぼくは思ってるんですね。(中略)

あの、ぼくの感じでは、普段こうやってる時には別に詩人ではないっていうふうに思ってます。それで、ぼくが詩を書きますよね。で、ワープロか原稿用紙に書いて一篇出来上がる、それでも何か詩人ではないんじゃないかと思ってます。それを、自分の目の届かないところなんだけども、誰かが読んでくれる。で、読んでくれて何らかの感情をそこでその人が動かしてくれたら、その瞬間だけ自分が詩人だというふうに言われてもいいんだっていうふうに思ってるんですね。だからふだん、他人に向かってね、詩人だっていうふうには非常に言いにくいし言えないと思ってる。だけど、自分が何かっていうふうに問われたときには、まあ夫であるとか父親であるとか普通の一般市民であるとかっていういろいろ言い方はありますよね。で、職業とか何とかじゃなくてね、自分が同時代の他者との関係において、夫とかなんとかって突き詰めて行った場合に、それだけでは済まない何かがどうもある。それは自分が何かを書いているから。その時にやっぱり詩人ていう言葉がどうしても出て来ざるを得ない。そこで何かこう一種、責任というとオーバーなんだけど、自分が社会的存在として何かを、それをひとつの立場として考えざるを得ないっていうことはあるっていう、そんな感じなんですよね。(以下、略)